

Bangladesh の女性たち①

子らは踊り私は歌う♪

ウシが牛肉になる——その光景はなかなか衝撃的だ。イスラム教徒が国民の9割以上を占める Bangladesh では、イスラム暦の12月に犠牲祭が行われ、神にウシやヤギなどのいけにえをささげる。犠牲祭当日とその前後は休日に指定されており、休暇を取って生まれ故郷に戻る人も多い。毎年この時期、首都ダッカの鉄道駅では車内から人があふれ、車両の上にもまで乗客を乗せた列車が出発する様子を見ることができる。間くところによると、車両の上も「座席」と見なされ、乗車料金を支払うそうだ。かくして、地方都市からの出稼ぎが多いダッカから人が消える。普段はごった返す道路や交差点が、まるで同じ場所とは思えないほど静まり返る。

いけにえのウシを食す

初めての犠牲祭を筆者は同僚のご主人の実家がある Bangladesh 西部・クルナ管区のとある町で過ごすことになった。2015年の犠牲祭は9月。まだまだ暑い日が続く。早朝

にダッカを出発し、車を走らせ、大きな川を車ごとフェリーで渡り、さらに車でひた走ること半日。ようやく目的の町にたどり着いた。 Bangladesh 人のお宅にお邪魔する時には、スイーツのお土産が欠かせないというのが同僚からの助言。町で1番だと名高いスイーツ店で、「ミスティ（ベンガル語で「甘い」の意）」と呼ばれる牛乳と砂糖を煮詰めたものを丸めて揚げ、さらにシロップに漬けた最高に甘いお菓子を3キロ分ずっしりと携え、お宅へ向かった。

私以外にも数人、同僚の知り合いの日本人がホームステイに来ており、初日の夜には町を挙げて私たちのウェルカムパーティーが催された。家の前の庭には天井代わりの布を張ったステージが設けられ、近所の子もたちが歌や踊りを披露してくれた。私は返礼として日本の歌、「上を向



町一番の歌姫が歌を披露



犠牲祭前夜に市場でウシを買う

いて歩こう」を歌った。地元のテレビ局をはじめ、およそ100人もの方が詰め掛け、「日本の友人たち、ようこそ！」と熱烈歓迎を受けた。地方の人たちにとって外国人が珍しいということもあっただろうが、「日本人は友達」という気持ちで、 Bangladesh 人に年齢問わず根付いていることを実感し、胸が熱くなった。

いよいよ犠牲祭当日——。前夜に市場で買い、連れ帰ったウシをいけにえにする様子を初めから終わりまで見る事ができた。宗教学校で儀式を学んだ人が祈りをささげ、ウシの命を絶つ。その後、使用人たちが

(右) ミスティを手土産に
(下) 犠牲祭の甘いお祝い料理「シュマイ」





ウシの解体を見るワタシを見学に来た子どもたち



水浴びに来た子どもたち

慣れた手つきでさばっていくのだ。恐らくこうした衝撃的な光景が苦手な方は目も当てられない儀式だろうが、私は少し遠くから椅子に座ってその様子を眺めた。さばいたばかりの牛肉で作ったカレーもごちそうになった。ついさっきまで生きていたウシの肉を私は食べている。そう思うと、いつも食べるカレーのようにはおいしさを味わうことはできなかった。だが、とても特別な味だ。そんな思いが込み上げてきた。人間が生きていくために糧となってくれる命があることを実感し、命の大切さを改めて感じた日になった。この国の子どもたちにとっても命の尊さを知る大切な行事なのだという。しかし、1時間を超えるこの光景をま

じまじと見入る外国人の方が町の人たちにとっては珍しかったようで、近所の子どもたちはウシそっちのけで、私たちを「見学」していた。

この町に滞在中、同僚の親戚はまるで家族の一員のごとく筆者を受け入れ、食事に招いてくれたり、サンダルを買ってくれたり、お祝い事ときに施すヘナタトゥーをしてくれたり、午前3時まで語り明かしたり……バングラデシュ人のホスピタリティを強く感じる事ができた忘れられない経験となった。

子育てはコミュニティーの中で

バングラデシュでは二世帯住宅や三世帯住宅が一般的だ。両親に加え、兄弟姉妹の家族と生活を共にすることが多い。同僚の実家でも、普段はお母さんと長男一家が暮らしている。また、ご近所同士の結び付きも強く、コミュニティーが助け合い、子どもたちやお年寄りたちを見守っている。こうした慣習は地方だけでなく都市部でも同様だ。近年では所得の向上により核家族も増えてきているというが、それでも両親と同居するか、同じ敷地内や近くのアパートに住んでいる人の方が圧倒的に多い。

ダッカで知り合った20代前半の

バングラデシュ人女性は、自分の両親宅に近いところでご主人と2人暮らしをしながら働いていた。その後、彼女は妊娠し、かわいい息子を産んだのだが、半年もしないうちに職場復帰を果たしていた。「子どもはどうしているの?」。私の問いに「お母さんが面倒を見てくれている」。肉親に預けているので安心なのだという。三世帯同居で生活する家族が多いバングラデシュでは、子どもを持つ女性が働く際、自分たちの親やきょうだいなど親類に預けることが一般的で、保育園に預ける方がむしろ珍しいのだ。

筆者はダッカに滞在した期間、さまざまな分野で活躍するバングラデシュの女性リーダーたちにインタビューした。女性が社会で活躍するためのヒントを得るためだ。その中で多く聞かれたのが「同居家族のサポートが得られやすく、出産後も女性が働きやすい」という声だった。



(田中 麻理 / ジェトロ海外調査部
アジア大洋州課)

次号では、「バングラデシュの女性たち② 男たちが後押し」をお届けします。



自慢の包丁さばき!